

<書評>

## 野澤久人（第4代福生市長）著『市長顛末記 ある公務員の仕事』

（A5判 2014年12月発行 発行所（有）セイビ印刷所・福生市加美平）

佐藤 進\*

### 本書の構成

上巻（194頁）

社会教育の時代—社会教育主事 公民館づくりと市民会館・公民館長  
市長部局の時代—市民課長 企画財政課長と企財部長  
助役の時代—助役になった経過 やってきたこと

下巻（242頁）

市長の時代—選挙 やってきたこと

東京・多摩地域社会教育分野の先輩である野澤さんが上記の図書を出され、非力を押しして紹介の役をお引き受けすることとした。私はかつて国分寺市の公民館に勤務し、ある時期から福生市に隣接する羽村市に住み、福生市の公民館、社会教育に接する機会もあった。

羽村市はすでに公民館を廃止し生涯学習センターに衣替えしてしまい、国分寺市は2015年から地区公民館ごとの運営審議会を全市一つに変えた。ほかの自治体を含め東京の公民館は変化が激しいが、そのなかで公民館体制を維持している自治体のひとつが福生市である。本書をひもとくことはその淵源にたどりつくことになると思っている。

なお、これまで敬愛の念をこめて野澤さんとお呼びしてきたので、本稿でもそうさせて頂く。

本書は社会教育の実践、理論、自治体経営の実践、理論の書であることはもちろんであるが、野澤さんの人生の書でもある。その総体を理解した上で紹介することは力に余る課題であり、社会教育、公民館に焦点をしばりながら、評者の問題意識でいくつかを取り上げるだけになることをご容赦いただきたい。

### 社会教育の時代

長野県出身の野澤さんが福生に就職されたのは、東京教育大学4年の秋（1961年）に福生町

---

\* 羽村市民。国分寺市の各公民館に勤務の後、香川大学生涯学習教育研究センター教授（04年まで）。日本公民館学会第5期事務局長。

教育長の突然の訪問をうけたのがきっかけとのこと。ちょうど62年度から3万人以上の市町村に社会教育主事を置くことが義務付けられた背景があった。「社会教育の仕事を一生涯のものに」（上巻17頁）という決意で福生に赴かれたようである。

社会教育主事の15年間には「総ての社会教育行政の分野の仕事をした」（上巻28頁）とある。プール、体育館、図書館など「社会教育機関の整備」（上巻37頁）、中でも公民館・市民会館づくりに取り組み、開館と同時に市民会館・公民館の館長の任に就く。

福生市の公民館には「会館紀要」（上巻45頁）という研究誌がある。これは「職員の専門性と研究結果を毎年報告するため開館年度から発行」されている。教育学、社会教育を専攻された野澤館長あつての英断の賜物といえよう。

本書年表によると、62年就職、63年係長心得、64年係長、そして77年に市民会館・公民館館長となっている。社会教育施設計画、施設づくりに専念しそのまま管理職になられたことは、自治体における社会教育職員の存在感という意味では嬉しい半面、職員は市民の要求に「教育的」に応える」（上巻61頁）という野澤理論を実践で示せなかったという意味で社会教育にとって残念であった。特に公民館保育室問題での「児童にも学習権がある」（上巻70頁）という野澤さんの提起を多摩地域の公民館職員レベルでもっと掘り下げられれば、三多摩の保育室論議に多角的視点が生まれ、その後の展開が変わった可能性もあるのではないかと、とも思う。自治体理事者からその能力を囑望されたがために現場実践を積み重ねる時間的ゆとりが与えられなかったのであろう。

## 市長部局の時代・助役の時代

市長部局への異動の最初は市民課長であった。その職務に疎い立場で考えると、出生届けや死亡届け、転出入届けなどの、当時でいう機関委任事務が主要な業務のように見えるが、防災・公害などの職務もあり、特に福生では横田基地の騒音問題も担当だったとのことである。そしてちょうど住民票の電算処理という制度改革をも担当されたとのことである。

84年から92年までの約8年は企画財政課長、企画財政部長に就かれている。この部署はいわば自治体の中枢部局であり、財政問題、行政改革などの実態をつかみ政策展開を進める部署である。当時設置されていた「行政改革審議会」での議論は「素人の企画財政課長として、この会は最高の学習の場」（上巻81頁）であったと述懐されている。

また第2期総合計画の策定を担当するなかで、「行政の文化化」（上巻86頁）を具体化されている。福生市図書館に行くと、前庭に石の地球儀と日時計がある。これは当時の市長の「世界に雄飛する子供達を育てたい」、「太陽と自然と一体化する」、「まちづくりの基本は、美である」という意志の表れであるとのこと。

茶室建設（上巻127頁） 公民館・市民会館と図書館を結ぶゾーンの一角に茶室「福庵」が

ある。きっかけは松山市に視察で出かけた議会総務委員会メンバーがすばらしい茶室に魅せられ、「このような文化的な施設が欲しいものだ」ということから始まったとのこと。建設計画によると、「ゆとり、真の心の豊かさの形成による風格のあるまちづくり」をめざしたものであった。「たまたま石川市長という文化への造詣の深い人が居て、建設担当部にこれまた良く理解できる人が居たという結果がこの茶室『福庵』を産み出した」とのことである。横田基地が市域の3分の1を占めるという、自治体の意志ではどうにもならない条件を市の国際化に取り込む、「米国人の日本文化への理解の一助に」との意味も込められた施設と言えよう。

都立宇宙科学館建設計画（上巻 146 頁） 隣接市との境界変更問題で、東京都が手続き上のミスから福生に迷惑をかけたことがきっかけで、「何か福生市のためにやれることはないか」という話がもたらされたとのこと。これに対し「多摩は日本の最先端の科学技術の集積している地域」との認識のもと都立宇宙科学館建設の提案をし、89年から94年まで具体化が進められ、最終的に知事の交代によりストップしたという。もし計画が実現していれば福生はもとより西多摩にとって非常にインパクトのあるできごとになったのではないかと思う。

## 市長の時代

経過（下巻 7 頁） 石川市長が3期を目途に退任するという。「傑出した市長」、「英邁な」市長として最側近・助役の立場で補佐してきた野澤さんにとってそれは苦渋の選択を迫られることでもあった。つまり後継の白羽の矢が野澤さんに向けられたのである。次の文には火中の栗を拾うべきか悩む心境が読みとれる。

「私は決断をすれば突き進む頑固なところはあっても、いつも自分より力のある人を先頭に立てて補佐していくやりの方が性に合っていた」、「自分のライフワークは社会教育であって、一般行政ではない」、「西多摩、福生という保守本流の地域の中で自分のような考え方が通用するとは思えなかった」、「福生に住んで、たかだか38年の自分が市長の支援はできても、市長などとはおこがましい」（下巻 9 頁）。

しかし相談する人たちから次々退路を断たれ、遂に立候補を決意。2月16日記者会見。それでも3月14日の日誌には次のように記されている。

「自分の中に適当な、どうにでもなるさと言った考え方がある。残念なことであるがそれで良いのかどうか今の時期の問題としては解からない。出来ればキチンと考えた方が良いがそうすると自分の気持ちが切れそうである」（下巻 15 頁）。

もう後戻りはできない。選挙戦に突入。「無所属で出馬するのだと思っていたが、選挙の時には政党支部が動かないと何も出来ないということで、自民党福生支部に入ることになりお世話になった」（下巻 23 頁）。これもまさに苦渋の選択であったと推察する。5月14日投票日。投票率38.39%。得票率72.40%の圧勝であった（下巻 28 頁）。しかし「大差ではあったが、投票

率の低さに愕然とし、同時に市民をいかに市政に参加してもらおうかが大きな課題として与えられた」(下巻 29 頁)と記している。

## 2 期目の選挙

2 期目の選挙は「対立候補は、福生首長選挙で初めて出なかった」(下巻 35 頁)。このことは野澤市政の 4 年間が多方面から評価された結果と受け止めてよいのだろうと思う。

職員の意識改革(下巻 54 頁)「地域主権下」、「情報化、グローバル化時代の自治体行政」には「職員自らが市民生活の中の問題を発見し、解決することが求められる」との認識から、1. 職員通信、2. タテ割りを越えた行政改革、3. プロジェクトチームの活用などを始め、さらに「自己申告と人事評価、昇任試験を組み合わせ」(下巻 83 頁)での人事改革も進められた。人事制度、給料表改定は助役時代にすでに取り組みされたこと(上巻 179 頁)であったが、その土台の上に更なる改革を行なったものと理解出来る。

市民の意識改革(下巻 85 頁)「誰かがどうにかしてくれるという依存体質から、主体的な自分達のまちづくりへと変えていく」、そのために「対話集会」「まちづくり市民フォーラム」「広報ふっさによる市長随想」に取り組んだことが記されている。その到達の上に創られたのが市民サポートセンター(下巻 125 頁)といえるのであろう。

子育て、ふっさっ子広場(下巻 113 頁)「福生市の子どもの問題」、「この実態と原因の究明、そこから新しい施策を実施することは自分が教育学をやってきたこともあって看過できない問題」(下巻 113 頁)との認識から、ふっさっ子広場(文部科学省放課後子ども教室事業と違う「福生型」、及び子育て支援センター事業づくり)に取り組んだ。これは子どもの問題は「子ども自身の問題と取り巻く環境の問題の両面から課題解決に取り組まなければならない」(下巻 122 頁)との信念からであったと思う。

横田基地 福生市域の 3 分の 1 を占め、立川市、昭島市、武蔵村山市、羽村市、瑞穂町にまたがる横田基地は、「KPCP(関東平野空軍施設整備統合計画)で関東地区の空軍施設が横田基地に集約」(上巻 40 頁)が進められた。「市は苦渋の選択の中で受け入れ、その見返りの補助金が大幅に増額されることになった」(上巻 40 頁)。つまり東京をはじめ関東地区の米軍基地は可能な限り返還が進められるのに対し横田だけは基地機能が強化されたということである。99 年誕生の石原東京都政により、「横田基地の軍民共同利用」(下巻 33 頁)が提唱され、関係市町で一定の取り組みはあったが 2015 年現在進展はない。

米軍による NLP(米空母艦載機による夜間離発着訓練)、に関しては三沢・福生・大和・綾瀬・岩国の各市長連名で 01 年 1 月に共同声明(下巻 151 頁)。また横田基地再編については 06 年 3 月に福生市長名で要請書をだしている。(下巻 165 頁)

基地の存在と財政については次のように記されている。「基地交付金」が「横須賀、三沢、岩

国に次いで全国で4番目に多い額である」、「一般の市にはないこの金は、地方交付税の基準財政収入額には参入されない」（下巻45頁）。つまり「見かけ上財政力指数は低い」が、「現実には金がある」（上巻98頁）という福生市財政の持つ複雑さを指摘している。

触れるべくして残された課題は多い。市民、市長など人間的に深いつきあいを重ねた出会いも感動的である。また七夕祭り（上巻170頁）、平和のつどい（下巻108頁）などなど、直接本書に目を通していただけることを期待したい。